



特定非営利活動法人
ぷれいす東京

20th
ANNIVERSARY

Newsletter

2014年8月号 No.82

CONTENTS

「ぷれいす東京20周年に寄せて」.....	01
ぷれいす東京 2013年度総会・活動報告会.....	02
AIDS is NOT OVER.....	05
QOGL ~Quality of Gay Life~ vol.4「禁煙しないとダメですか?」.....	05
「制度があっても使えない? セクシュアル・マイノリティから見る貧困問題」.....	06
ぷれいす東京設立20周年記念シンポジウム	
「HIV/エイズとともに歩んだ20年と、これからのこと」.....	07
The Tokyo HIV Peer Support (東京HIVピア・サポート).....	12
ネスト・プログラム.....	12
「職場とHIV/エイズハンドブック ~HIV陽性者とともに働くみなさまへ」	
PDF版 発行.....	15
「とも・ナビweb」オープン!.....	15
部門報告(2014年4~6月).....	16
新人ボランティア合同研修案内.....	20

ぷれいす東京設立20周年記念巻頭シリーズ 第2弾

「ぷれいす東京20周年に寄せて」

砂川秀樹（レインボーアライアンス沖縄代表）

つい先日のこと、私は「実際にこれをやることになったら大変だ…」と思いながら、ある助成金に申請するプロジェクトの企画書を書いていました。それは、やることになれば、私が沖縄で初めて本格的におこなうHIV関連の活動で、難しい側面を持つものだった。「きついなあ…出すのやめようかなあ」と思いながらも、PC上で文字を打ち込む手は止まらず、結局完成させて提出した。「よく書いたねえ」と言う活動仲間の声に「憑依^{ひょうい}って感じだったよ!」と答える私。もちろん、それは冗談だったのだが、その言葉を聞いたある人は、真面目にこう言った。「いろんな人の思いや悲しみ、期待を背負ってますものね」。

私は、三年前に、21年間住んだ東京を離れ故郷の沖縄に戻った。私の東京生活は常にHIV/AIDSに関する活動とともにあった。ぷれいす東京にも設立時から参加し、設立間もない頃から事務局長を務め、東京を離れるまでかわっていた。だが、沖縄に戻って来てからは、ほとんどHIVの問題に関わってこなかった。レインボーアライアンス沖縄という団体でLGBTに関係する活動を展開しながらも、いくつかの理由から迷うところがありたっていたのだ。

しかし、それでも、私にはHIVに関する相談や経験談がいくつも届いた。中には、私がその問題に関わっていたと知らずとも話してくれた人もいた。

そのうちの一人は、ほんの数年前にパートナーをHIVで亡くした人だった。遠距離づきあいだった相手がふらりとやってきて一緒に住み始めたが、「喘息で体調を崩している」と言い続けた彼は、どんどん体調が悪くなった。そして、病院に行く事を勧めても拒否し、自宅で亡くなってしまった。亡くなった後に、HIV感染による肺炎だったことがわかった。それを話してくれた人は、「本人

は知っていたのではないか」と言う。「自分がもっとHIVのことをわかっていたら、もっと何かできたのではないか」と悔やみ続けているという。

友人の「いろんな人の思いや悲しみ」という言葉を聞いたとき、彼の語ってくれたその話や、1990年にHIVの活動に参加し始めた頃のこと、HIVと闘いながら亡くなっていった友人、知人たちの姿が思い出された。そして、自分は、やはり沖縄でも、HIVの活動にもっと積極的に参加していくべきなのかもしれないと思った。

そう思い、「どんな活動をどんな風に?」と考えるとき、自分のHIVに関する活動や研究の経験、そして出会いの大部分がぷれいす東京を通して得られたことが自分の土台を形成していることを実感する。

前代表の池上千寿子さんの下で活動する中で、行政との協働の大切さや、団体を率いる者の覚悟を学んだ。現代表の生島嗣さんからは、相談や支援で寄り沿いつつも巻き込まずに踏みとどまる姿勢を教わった。長らく相談業務を担当している牧原信也さんからは、明るく飄々とした表情が人をどんなにほっとさせるかを学び、電話相談の佐藤郁夫さんからはつながり支える気持ちがいかに人を助けるかを教えてもらった。もちろん、たくさんの関係者の皆さんから多くのことを教えてもらった。ぷれいす東京で得られた知識と経験は、私にとって貴重な財産であり、その存在は、東京から遠く離れ、時に心細くなる私を下支えしてくれている故郷のようである。だから、心をこめて、この言葉を。

20周年おめでとうございます。そして、活動を続けてくれてありがとう。

レインボーアライアンス沖縄
<http://allianceokinawa.seesaa.net/>

ぶれいす東京 2013年度総会・活動報告会

総会・活動報告会が5月25日に新宿区戸塚地域センターで開催され、活動報告会は参加者・スタッフ・ゲスト合わせて55名の参加がありました。恒例となったリレー方式の部門報告に続いて、20周年の区切りにあわせて、ボランティア感謝状の贈呈式とトークコーナーが設けられました。

5月25日に第20回目にあたる年間活動報告会を開催しました。当日は、ぶれいす東京スタッフ以外にも、当事者や企業の方、連携機関の方など、様々な方にご参加いただきました。この場を借りて御礼を申し上げます。

トークコーナーでは、10年以上にわたり、ぶれいす東京の活動を支えてくれている、ボランティア・スタッフ達に感謝状を理事より贈呈し、トークを行いました。長年ボランティア活動をしているスタッフの、参加の動機は本当にさまざまでした。

「身内の看取りは上手く出来ずに、他人のケアだったらうまくできるのではと思い参加した」

「ゲイ雑誌で記事をたまたま見て、人間関係を広げたいと思い連絡した」

「カウンセリングの勉強をしていた時の先輩から誘われて（怖くて）断れなかった（笑）」

「海外から帰国してゴム無しのセックスを強要されたら、自分は“NO”と言えるけども、そうでない女性が多くいることに気づき参加した」

「自分のHIV陽性がわかったときに、ぶれいす東京にお世話になったので、落ち着いてから恩返しと思い参加した」

「自分が検査を受けたことがあって、HIVについて何も知らなかったから、ちょっと勉強してみようと思って」

「自分は相手にコンドームを使ってって言えるけど、言えない人がいるのが信じられなくて（笑）どうしてなんだろうという所から興味をもった」

「パートナーが陽性だとわかり あちこちの保健所や電話相談に相談したら、どこにかけても“ぶれいす東京”という怪しい名前がでてくるので、この団体に興味をもった。実際に事務所を訪問して、池上前代表の説明を聞いて、このおばさん（爆笑）信用できるとおもった。」

など様々。笑いあり、ほろっとするところありの楽しいトークとなりました。

特に印象的だったのは、トークに参加してくれたボランティア達が口にした、ぶれいす東京の居心地の良さ、スタッフ同士の人間関係の輪の存在でした。自分のことをどこまで話す、話さないという個人の意思や多様性を尊重しあえる関係、ぶれいす東京が築いてきた人間関係は本当に宝だと実感しました。今後は何とか地域社会にも広げていきたいと考えます。（報告：生島）

■感謝状贈呈者＆「ぶれトーク！」より

「12年を振り返ってみると」 白幡素子（ホットライン）

ボランティア感謝状と花束をいただき、トークコーナーでもお話しさせていただきました。

活動を始めた12年前のことを振り返ってみると、ご披露できるほど高い志があったわけではありませんでした。

あるカウンセリングの勉強会でいっしょだった方がホットラインの相談員をされていて誘われて、どうしようかなって言ったら、まず電話してごらんさいって言われて……。その頃はインターネットもなかったのも、どんな団体かわからず、おそろおそろ電話をしたら、出たのが生島さんで、高田馬場からの道順を丁寧に教えてくれて、方向音痴の私がまったく迷わずに事務所に行くことができました。的確な道案内、これが始めたきっかけとも言えるかもしれません（笑）。

私は主婦で医療関係者でもないのも、性的な言葉を口に出すということがまったくあり得ない状況でした。そういうことが苦手だったかもしれません。ところが、いまはホットラインで電話に向かうと、まったく抵抗なく話ができます。これは私の自分の人生においての大きな進歩です。私生活ではまだ十分に生かせていないかもしれませんが（笑）、これからまた変化があるかもしれませんので、乞うご期待。

すごくいい仲間と巡り合えて、こうして活動を続けてこれたことに感謝しています。ホットラインの部門報告で、活動を始めて1年目の方が「すごく居心地がいい」とおっしゃってくださって、“おつぼねチーム”としては（笑）、それはとてもうれしいことです。自然体で主婦としての持ち味を活かしながらか細く長く続けていきたいと思っています。これからもよろしくお願いします。



感謝状贈呈式で
花束を受け取る
ホットラインの白幡さん

「PGMを通じて感じたこと」

こまばば（新陽性者PGMピア・ファシリテーター）

今回10年以上PGMの活動に携わったということで表彰いただき、恐縮しています。

私とPGMとのそもそもの関わり合いは、プログラムの利用者として参加させていただいたのが始まりで、その時の印象は（まだ第1回ということもあったからでしょうか）手作り感がたっぷりだけれども、ファシリテーターのやる気がすごいということでした。

その後いつの間にかPEERファシリテーターとしてPGMに参加させていただく立場になり、HIV感染初期の方々とお会いして気づいたのは、薬がよくなり治療の負担が劇的に改善した今でも感染初期の不安感の深さはまななのということです。もちろんその不安感は、私自身が感じた不安感とは異なったり、場合によってはHIV感染に起因しないご自身の状況だったり内容は様々なの

ですが、薬の選択をはじめ自分で人生設計にかかわる決断を下さなければいけないこの時期に、同じ立場の人の話を聞いたり、自分の話を聞いてもらえる場があることが、大きな安心感につながっていると感じています。

これからもより多くの方により療養生活のスタートをきってもらえるよう、PGMに関わっていければと思います。表彰いただきありがとうございます。

「ボランティアをされている方々の生の声に触れて」

ガジ (web NEST[つれづれ日記]ライター)

機会に恵まれ、数年ぶりに活動報告会に参加しました。この報告会では、自分がお世話になったネストや相談部門以外の部門のお話も聞くことができるのですが、今回はとりわけ、研究部門の「地域において HIV陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究」についての概要報告が、大変興味深く有意義でした。メンタルヘルスにおいて薬物との関わり合いについての切り口などは、自分にはそのような発想がなかったので新鮮に思えました。

また、今回はぶれいす東京設立 20 周年ということで、各部門で、長年ボランティアとして参加している人々のお話を拝聴することができました。自分も、web NEST で日記を掲載させていただいており、部門それぞれで、活動の性質が違いますので、みなさんがどのようなきっかけでボランティアを始め、そしてどのような気持ちで活動を続けていらっしゃるのか等、大変興味深く、また刺激になりました。

ぶれいす東京の日々の弛まぬ活動の積み重ねの結果が、この 20 周年の節目に繋がったわけですが、自分もお世話になった者として、微力ながら続けられる限り、お役に立てたらと気持ちを新たにしました。

「ぶれいすとバディと私」 こんどう (バディ部門)

ぶれいすに活動登録したのは 1998 年で、当時バディ部門は今のような合同研修はなく、個人研修を 5~6 回？受けた後、バディ部門希望者だけの 1 日研修を経て活動を始めるという流れでした。

研修後ほどなく、2 週間に 1 度の定期訪問をさせていただいたのが私のバディ活動のはじまり…。依頼者の方の気持ちの変化や接し方に戸惑う事の連続で、バディミーティングで同席されている皆さんにアドバイスを受けながら活動していた事をよく覚えています。

そんな中、2 回目の訪問の数日後に亡くなられた方がいらっしゃいました。さらに次の定期訪問をさせていただいた方が約半年後に亡くなられました。精神的に辛くなり、その後は継続的な活動を休ませていただきました。

それ以来、単回の依頼に対する活動だけでしたが、十数年ぶりに今月から 2 ヶ月に 1 度ではありますが定期訪問の活動を始めました。頭のどこかで過去の出来事が想い出され、自分が関わる人がまた亡くなられたら…という不安な感情もありましたが、「大丈夫だよ」という、もう一人の自分の声が背中を押してくれたおかげかなと思います。

今後も「自分ができる時に、できる範囲のことを」を心に、バディ部門、ニューズレター等のお手伝いを続けていければと思っています。

名字が「こんどう」だから、小中学生の頃に「コンドーム」とあだ名をつけられ、HIV の報道がメディアで伝えられた当初は、名前が「えいじ」だから「エイズ？」とかわられた自分の名前が嫌になった時代もありましたが、そんな名前も多分ウェルカム状態なぶれいす東京と出会えたのは運命なのかなと感謝しています (^^)

「カラフルなメンバーでのぶれトーク！」

みず (PEP 大人のオンナ部門)

ぶれいす東京のボランティアとして 10 年以上参画してきたということで、先日の活動報告会で、素敵な花束と感謝状をいただきました。マイペースで気づいたら 10 年たっていた…というだけなので、恐縮していますが、同時に、ぶれいすのスタッフや部門メンバーへの感謝と努力できた自分自身への喜びを感じました。

活動報告会では、感謝状をもらったメンバー + α での「ぶれトーク！」が印象的でした。50 名くらいいる参加者の前で、かなりのぶっちゃけトークがさく裂。さすがぶれいすスタッフ、引き出しが多いこと。

「ぶれトーク！」で、特に素敵だったのは、パネラーのカラフルさです。セクシュアリティ、ジェンダー、年齢…(あ、一部、セクシュアリティは偏ってた？)。

いろいろな人たちと生きていく素敵さ、個人の選択を尊重して寄り添おうとする姿勢の素敵さ、を実感した 1 日でした。実践するのはとても難しいですが、意識して生きようと改めて感じました。



「ぶれトーク！」
PEP 大人のオンナ部門の
いみさん (左)、みずさん

「The 3rd place—とびっきり居心地のいい場」

ヤマコ (ホットライン/Gフレ)

機内で、発表する原稿をまとめて「完璧だぁー」と思いきや、活動報告会会場に着くと、「ヤマコ、後半のトークセッションに出てくれない？」と。(聞いてないんだけど…)

Gフレの発表も終わり、後半のトークセッションへ。長期間活動されている先輩方のトークの後に、生島さんに呼ばれて前に座わり、ぶれいすのことを「怪しい団体」と言ったり、理事の池上さんのことを「オバさん」呼ばわりしたのは、あたしです (汗)。でも活動に参加する前ってこれが本音でした。(自分と相方のことで切羽詰っていたので)

都市社会学の Oldenburg が言うには、人が家庭や職場の役割から解放され、くつろげるのが「The 3rd Place (第三の場)」だという。まさにぶれいすのこと！本音で語れる、とびっきり居心地のいい場だと実感した。

引っ越しをしたため、活動の方は一時休止になるが、今度は地方で「とびっきり居心地のいい場」を作りたいと企み中のヤマコでした。

■会場より “ひと言感想文”

○小樋井 (ホットライン)

去年9月の研修を終えて、「よちよち」を卒業できたのは、面倒見のいい先輩方のおかげだとつくづく感じた一日でした。ぶれいすのことは、やっと味が分かり出したぐらいですが、大事に紡がれてきた、いい具合のチームワークの中で自分にできることを見つけていこうと思います。

○山下敏雅 (永野・山下法律事務所 弁護士)

長年ボランティアをされてきた皆さんのお話が、とても楽しく、心に沁み入りました。年齢も、性別も、セクシュアリティも、ボランティアを始めたきっかけも、本当にバラエティに富んでいて、そしてそれぞれが、とても生き生きしていたのが印象的でした。

○新米PF

報告を聞きながら、ぶれいすとの関わりを振り返る。4年前にPGMに参加したのがきっかけで今では、ピアファシリテータ (PF) に立場を変えて関わっている。ボランティアの表彰になり、大先輩のPFが表彰！僕はまだスタートにたったばかりだけど長く続けてこんな素敵なスピーチが話せたらいいなと思った報告会でした。

○東條英之 (鳥居薬品株式会社)

ぶれいす東京の活動報告会に参加してきました。活動を始めて20年。国内のHIV診療経験年数を考えるとすごい数字です。また、ボランティアの方々の話を聞けましたが、皆さんの目が輝いていたのが印象的でした。肩肘張らずにボランティアを行うことが長く続く秘訣とのこと。なるほどでした。

○こまぶー (ゲイ 男性 30代)

パートナーが、10年ほどのボランティア活動を活動報告会の中で表彰してもらえるとのこと、同行させていただきました。活動報告会という真面目顔で固い話、退屈な長い話というイメージがしますが、時折笑いが出るな

ど、パートナー、そして他にも表彰される方、活動を報告する方、みんなが笑顔でした。表彰されている彼は輝いていて、ほんの少し惚れ直しました (笑) 参加させてもらって良かったです。

○キムスリョン (新聞記者)

「感染判明直後は今も昔も陽性者が不安であることには変わりはない」。過去と現状を比較し、報告する姿が印象的だった。陽性者を取り巻く“今”に長年寄り添ってきた証だろう。HIVが長く息づいてきた事象なのだと改めて教えられた。

○三浦聡之 (ヴィーブヘルスケア メディカルアフェアーズ)

初めて活動報告会に参加させていただきました。今までごく一部の方としか接点がなかったのですが、ぶれいす東京がとても協調性のあるよい組織であることが実感できました。今後とも一緒にできることを願っております。

○show [ショウ] (バディ・スタッフ)

活動報告会では、バディに携わる一人として牧原さんと一緒に意見を発表させて頂きました。バディに携わり4年目、一人のクライアントさんに寄り添う様に心掛けて、お陰で3年目に入りました。用件も少しずつですが多様になり、自分でも少しは役立てているかな？とは思える様になりました。また、活動報告会では、長年のぶれいすでのボランティア活動された方々の表彰に感激を覚えて、是からの己の活動の励みにとてなりました。私もいつかあの様に成りたいと思い、是からも活動に微力ながらも参加していきたいと改めて強く感じました。

○石坂わたる (中野区議会議員 無所属 ゲイ)

ボランティアの方々の関わりのきっかけ、続けてきた理由を知ることができました。特に継続ということは重要なキーワードだと感じています。継続的な一人ひとりの小さな活動が社会を動かす力になるのだと改めて感じました。



ホットラインの部門報告
佐藤コーディネーター (左)
と小樋井さん



受付の様子



バディの部門報告
牧原コーディネーター (左)
と show さん



ネストの部門報告をする4名

AIDS is NOT OVER

「エイズはまだ終わっていない！」

ーパレードにエイズをテーマにしたフロートが戻ってきましたー



4月27日に開催された東京レインボープライドには、主催者によると行進の参加者約3,000人、沿道約2,000人、会場10,000人、合計で約15,000人が参加したとのこと。

LIVING TOGETHER を掲げたフロートは、エイズ予防の戦略研究の枠組みでは、2006年、2010年に参加しましたが、今回は4年ぶり3回目の参加です。今回も、LIVING TOGETHER計画（ぶれいす東京とaktaが呼びかけ団体）が企画運営を担当し、アートディレクターには、張由紀夫さん／瀧見陽さん、フロートのデザインと手配は松原新さん、事務局は荒木順子さん／高久陽介さん／生島というチームで、フロートとブース出展を支えました。



フロート搭乗：右から安倍昭恵さん、HOSSYさん、長谷川さん

フロートの搭乗者は、ドラッグ・クイーンのHOSSYさん、DJのNARUSEさん、JaNP+の長谷川博史さんの3人の予定でしたが、シークレットゲストとして安倍昭恵首相夫人が搭乗しました。昨年6月に横浜で開催されたアフリカ開発会議で、長谷川さんが安倍夫人と同席してから親交を深めていたことや、その後、UNAIDSランセット委

員会の委員を就任したことなどで今回の参加につながったそうです。

昨年、東京のパレードが再開しましたが、今回は参加することができませんでした。そこで、今年はLGBTコミュニティの最大イベントであるパレードにぜひHIV／エイズをテーマにしたフロートがあって欲しいという願いから、今回のチームを結成しました。



プラカードにはさまざまな言語でメッセージが

今回は予算がゼロだったので、バッチをデザインしてもらい、3個をセットにして寄付をしていただいた方にプレゼントしました。用意していた300セットはすべて無くなり、寄付総額は、347,614円＋500パーツ、1ドル35セントでした。会場にいかにも多様な人たちが集まっていたのかを物語る数字かと思います。収支は、ボランティアで参加いただいたクリエイターの方々の好意にも助けられ、費用は全額を寄付でまかなうことができました。

LGBTのなかでも、市民のなかでも必ずしも関心は高くないなか、「エイズはまだ終わっていない」こと、今も優先度の高い重要な課題であることを、このパレードから発信できたのではと思います。

（報告：生島）

QOGL ~Quality of Gay Life ~vol.4「禁煙しないとダメですか？」

2月に開催を予定していたものの、当日首都圏を襲ったまさかの大雪で中止になった「QOGL vol.4」。再度スケジュールを調整し、5月17日（土）に新宿区戸塚地域センターにて開催しました。

もともと「タバコ」というテーマに決めた後、各方面から「難しいことやるね～」みたいなリアクションを多数いただきました。とはいえ「健康に関する情報を知るとともに、それを知った上で自分なりの選択をすることを応援したい」というイベントである以上、このテーマは避けたくないということで開催することに。当日はスタッフを入れても20人に満たず、集客としては良くなかったものの、単なる禁煙セミナーで終わらず健康とライフスタイルを考えるイベントにはなったと思います。

前半の井戸田先生のレクチャーは、一般的な喫煙のリスクに加えて、「減らすだけではダメなのか？」といった基礎的な質問への回答も盛り込んでいただきました。ちなみに、1本1本をしっかりと吸うようになるので、効果を出すには減らすのではなくやはり禁煙しないと、とのこと。後半は孔明さんを交えてのクロストーク。今回は

事前に簡単なwebアンケートをとってみたのですが、スタッフが注目していた設問は、タバコを吸うか吸わないかが自分と真逆の人が好きになったらどうする、というもの。「そんな人は最初から対象外」的な声が多いかと思っていたのですが、意外にも吸う側・吸わない側どちらも「自分が我慢する」が最多回答に。これって、もしかして「コンドーム使いたいけど言い出しにくい」みたいなことと通じるところがあるのかな、という気もしました。「パートナーにやめてほしいのだけどどうしたら良いか」という質問も多く、これは井戸田先生にとってもなかなか難しい質問だったようですが、孔明さん自身は吸う者どうして付き合っていた時に一緒にやめようとしてみたことがあるそうで、同じゴールを二人で目指してみるのも良いのかも、というヒントをいただきました。体のことと、二人のライフスタイルをどう整理してより良くし

ていくか、そんな視点を持つことができたのではないかと思います。

当日は、聴講して勉強したいと、部門を越えてホットライン部門の鈴木さんが参加してくださいました。鈴木さんに感想をお寄せいただいたのでお届けします。

(報告：sakura)

Gay Friends for AIDS の禁煙の話を拝聴させていただきました。無理を聞いて下さった皆様、ありがとうございます。



講師はしらかば診療所の
井戸田一朗先生。



Go-Go BOY の孔明さんには
喫煙者としてコメントをいただきました。

います。

HIV陽性者の喫煙は、呼吸器疾患だけでなく、近い将来の心血管系合併症、非エイズ関連腫瘍などのハイリスクであり、禁煙が介入できる手段として有効といわれています。今日のキーワードは「折り合い」なのかなと思いました。HIVの有無にかかわらず、タバコが自分だけでなく周囲の者にとっても有害であることは明白なのに、止められないのはどういうことか、恥ずかしながら医療者の目線でしか考えていませんでした。

事前にとっていた喫煙に関するアンケートでは、吸う、吸わないに関係なく、パートナーに合わせて我慢する傾向があることが把握されていました。全ての人が正しい選択をして、正しい人生を歩むのがいいのか、自分ばかりで喫煙をしていて、タバコの楽しみを知っていることを後悔していない、と井戸田先生は話されました。どの選択をするかはその方自身であり、強制されるものではないです。

薬剤師としてできることは、科学に基いた情報を正しく伝えること、手を出された時に適切につなげることかなと思いました。そのために実際のところを知ることは有用で、その機会を与えてくださったことに感謝です。(HL部門：鈴木)

「制度があっても使えない？ セクシュアル・マイノリティから見る貧困問題」 視野を広げる反貧困ネットワークセミナー ～こんな切り口もアリじゃない？

主催：反貧困ネットワーク、共催：NPO法人自立生活サポートセンターもやい、NPO法人ぷれいす東京（「連合・愛のキャンパ」助成事業）

会場には、120人を超える人たちが集った。貧困問題とセクシュアル・マイノリティとの交差点には、HIV/エイズや依存などの重要なテーマが見え隠れするが、これまであまり触れられなかったこともあり、今回多くの関心を集めた。参加アンケートによると、「とても良かった」「まあ良かった」を合わせて9割以上という高い評価を得ていた。

プログラムでは、HIV陽性者支援の経験や調査結果から、カミングアウトの実態、転居経験がかなりあること、離職・転職により失業が増加すること、精神的な健康状態による影響などを生島が報告した。続いて、もやいの大西氏からは、貧困の定義の紹介、生活保護は216万人が利用し、高齢者、疾病、障がい者世帯、母子世帯が多い現状を紹介しつつ、昨年12月に生活保護法が改正され、「扶養義務者への調査権限の拡大」が行なわれ、より「家族」という枠組みが強調されたものに変えられてしまったことが報告された。

その後、4つの事例をもとにグループで話し合いをし、課題は何か、当事者のニーズは、相談がきたらどう対応するかをテーマに意見交換を行ない、グループごとに話し合いの結果を報告してもらった。

[4つの事例]

- ・ 同性のカップルで同居、一人が病気で働けなくなり、経済的に行き詰まった。
- ・ 刑務所からでてきたばかり。身柄引受がなく、住む場所、経済的課題がある。
- ・ 東京に移住。サウナにて寝泊まりしながら、バイトをしているが、生活が苦しい。
- ・ 自分の性別に違和感があり、最近、服装を変えたのだが、親から拒絶され、家を追い出されてしまった。

最後に3人のコメンテーターにより、報告をしてもらいました。児童相談所勤務の末浪伸二氏、弁護士の山下敏雅氏、ケースワーカーの横田氏です。地域で役割分担をしながらもお互いに紹介しあえるコミュニティができたら素晴らしいというコメント、男性が同居するのが難しいのであればシェルターをつくるなど新たな取り組みがここからスタートしたらいいな、など。

(報告：生島)



コメンテーター（左から山下氏、末浪氏）

ぷれいす東京設立20周年記念シンポジウム

「HIV/エイズとともに歩んだ20年と、これからのこと。」

シンポジストとしてぷれいす東京の理事4名を迎え、4月29日に新宿区笹笹地域センターにて20周年記念シンポジウムが開催され、会場は94名の参加者で満員となりました。(このシンポジウムは「TOKYO RAINBOW WEEK 2014」参加イベントです。)

国際エイズ会議が日本で初めて横浜で開催された1994年、ボランティアの有志により「ぷれいす東京」が設立されました。

以来20年間、年間約4,000件のHIV陽性者とそのパートナー・家族からの相談、年間参加者1,000名を超えるHIV陽性者等向けプログラムの実施、2,400件の感染不安に関する電話相談など、地域に根ざした活動を続けています。

また、1997年からは10年に渡り、ゲイ・バイセクシュアル男性向け啓発イベントVoiceを開催し、その後も、「Living Together」というHIV陽性者や周囲の人による参加型キャンペーンを呼びかけるなどしてきました。

ぷれいす東京がこれまで歩んできた道のりを、設立当時をよく知る人のトークで振り返り、これからの道すじを探りました。

出演：池上千寿子（ぷれいす東京）

樽井正義（慶應義塾大学名誉教授）

根岸昌功（前都立駒込病院感染症科部長／ねぎし内科診療所院長）

宮田一雄（産経新聞編集委員）

司会：生島嗣、大槻知子

池上千寿子

●横浜会議とぷれいす東京設立

1993年にベルリンで行われた国際エイズ会議の閉会式で、翌年に横浜で国際エイズ会議が開かれることが発表されました。横浜会議の説明会場ではセックスワーカーやドラッグユーザーのユニオンの人たちのシュプレヒコールが聞こえてきて、横浜をボイコットしようという話もありました。私は会議主催者として、いつもと逆の立場にいるわけで微妙な感じになりました。でも、横浜会議はみんなの会議なんだから、みんなでつくろうという話をして、ボイコットの話は幸いにもなくなりました。

私の横浜会議での役割はリエゾン、つながるという意味です。国内ではすでに3年くらい活動をしているNGOの人たちを中心として委員会を作って、世界から来るNGOやHIV陽性の活動家たちをちゃんと受け入れよう、宿泊拒否や入国拒否などが起きないようにと準備をしました。エイズの会議と言うのはみんなで作るもので、いわゆる医療専門家だけのものじゃないんだという共通認識が国際的にはすでに生まれていて、それに向かって日本の私たちは何ができるかを考え、ありがたいことに何とかできたと思います。今日はそのとき共に獅子奮迅の働きをしたメンバーも来てくれてうれしいです。

横浜会議の数か月前にぷれいす東京を作ることになりました。いろんな意見があっただけで、せっかくアジアで初めての会議をするんだから、自分たちの理念で活動していて、みんなとつながっているグループがいるということ発信したい。ケアを組織として実践し、なおかつアジアに開かれている組織が必要だと。それで、横浜会議でデビューしなきゃということになったわけです。会議は8月で、4月にぷれいすを立ち上げました。幸いにして生島さんをはじめとして20人近い仲間がいて、3年持てばいいなと思っていたのが20年。今日は感慨無量です。

横浜会議で学んだのは、民間、行政、当事者、専門家いろいろな人が一丸とならないとできないということ。やる気になればできるが、やる気にするまでに大変エネルギーがかかる。準備と時間と努力がいる。ただ気持ちがあればいいんじゃない、同じ方向むかなくちゃいけないということです。

国際会議というのはイベントですから、これが終わったらそのままということになりかねない。ところが、幸いなことに横浜のすぐ後にパリエイズサミットがありました。横浜の成功で、日本でもNGOやHIV陽性者とパートナーシップを組んでやったほうがいいということを行政も理解した。それでパリエイズサミットにNGOとHIV陽性者の代表が政府代表団として参加したんです。ここで、エイズ対策にはHIV陽性者の積極的で意味ある参加が不可欠だという宣言（GIPA）が出されました。国際的な理念として発信され、私たちの筋道がついたというか、理念が確認されたという感じです。

さて、立ち上がるにあたって大事なものは、名前です。名は体を表すといいますから。海外の人にも一目瞭然でわかりやすく、なおかつHIVは名前に入れられないということにしました。なぜかと言うと、その当時、タイトルにHIVがあると東京では事務所を借りられなかったからです。その結果、みんなで知恵をしぼって考えたのが、Positive Living And Community Empowerment、その頭文字をとってPLACE、でもカタカナはやめよう、ひらがなにしようということで、「ぷれいす東京」になりました。



池上氏

●この20年で変わったこと、変わらないこと

変わったことは、NGOがとりあえず認知されたかなということ。それまでは“ボランティア団体”と言われて、確かにボランティアなんですけど、時間があって暇な人が勝手にやっている、そういう目で見られました。とにかく責任あることを継続してやれませんか。

1995年に阪神淡路大震災があって、あの時に駆け付けた大勢の人たちのこともあって、行政やプロに任せておくだけじゃ世の中は変わらないということを、幅広く見せてくれるようになった。私たちも2000年に法人格を持つようになり、研究主体になれるようになったりしました。いろんな法人が出てくると、そこでまた淘汰されていたりもします。そして、今度は3.11です。社会を動かしていく、作っていく、変えていくのにどんな力が必要なのかといった認識はかなり変わった。それは良かった。20年やってきて、方向はこれでいいんだと感じています。

変わってないことは、HIVの薬はできてHIVとともに生きていく時間が長くなっていくというときに、この社会の中でほんとうに生きていく場、環境がどれくらいこの20年で整備されたのかと言いますと、残念ながら大いなる疑問符がつきます。時間が延びただけ新たな問題がどんどん浮かびあがってくる。高齢化もそう、介護の問題もある。薬でウイルスを抑えればいいだけじゃないじゃないですか。新たな課題が多様化して複雑になっているのを痛感します。HIVの社会的側面があぶりだされているのだと感じます。そういう意味で「AIDS is Not Over」ですよ。

幸いなことに、仲間がいて、今いっしょに並んでいるみなさんもそうですけど、仲間と手を携えて協働することが出来るということは20年前にわかりました。だから、あきらめることはない。できる。

ふれいす東京の名前にHIVというのを入れなかったのが、今になって良かったと思ってます。今私たちが抱えている課題というのは、HIVがあろうがなかろうが、今この社会で生きている私たち全員に関係しているからです。そのことを伝えやすい。HIVだからでしょ、特別でしょっていう受け取られも大変多かったです。だけど、そうじゃない。社会で生きているひとりひとりの課題が、HIVを通して端的に見えますよ、これを共有していきましょう。そして、変えていきたい。これがこれから発信していくべき大いなる課題だと思います。

根岸昌功

●1994年前後のHIV／エイズの医療

当時、すでにHIVの増殖メカニズムの研究、免疫のメカニズムの解明が盛んに行われていました。抗HIV薬の開発が行われ、逆転写酵素阻害剤のAZT、ddC、3TCなどが使えるようになりました。これらが使えるようになったのは大変ありがたいことで、画期的なことだと考えていました。プロテアーゼ阻害剤も研究されていて、その後インディナビルが試験的に使われるようになっていきます。

AZTを単剤で使うようになりましたが、どれくらいの量が必要なのかかわからない。アメリカでの何ミリという情報に基づいてやりましたが、ほとんどの方が飲みきれずに脱落しました。単剤のあとには、交代療法。AZTを飲んで、次に3TCを飲んで、AZTに戻ってという。その後に耐性というのが問題になりましたが、当時はとにかく薬を使って何とかするというのが先決でした。免疫を再構築していくということと、 α インターフェロンなどを使って壊れた免疫機能を元に戻そうということをしたのもこのころです。そして併用療法。いくつかの薬を組み合わせたやり方です。国際会議でDr.ホーが報告をし、これまた画期的だと言われて始まり、やがてHAARTと呼ばれるようになりました。

臨床の現場では日和見感染症の予防が行われるようになります。しかし、予防治療は保険の対象になりません。今でもそうですが、カリニ肺炎の予防をしなくてはならない場合に、「カリニ肺炎予防」という診断名がないんです。カリニ肺炎になりましたということだと保険適用を受けられない。保険対象の外にある予防という概念がこのときに初めて出てきました。

1992年に駒込病院の中で自殺をされた方がおられます。臨床にとって大変な敗北で、我々医療従事者はどうやって受け止めたらいいかわからなくて大混乱しました。そのときに、アメリカの「エイズ・ヘルス・プロジェクト」が日本語に翻訳されました。HIVの臨床で心理的な支援が非常に重要だということで、私たちはこれに大きく影響を受けます。ただ、今も「心理的支援は医療に非ず」という位置付けは変わっていません。精神科で行われる以外はすべて保険の適応外ですし、カウンセラーという公式の職域はありません。

臨床では、医療技術の提供のほかに重要なのが、場を確保するということです。当時は血友病の治療からHIVの治療へという流れがあり、私たちは感染症の対策と治療という流れになります。茨城や甲府などでの騒動が起きたりして、医療も過剰反応し、社会に不安が広がっていました。高知の事件でも「自分の病院にはエイズの人はいません」という掲示をしたりしていました。何とかしようということで拠点病院の構想が出てくるわけですが、その前の段階として非公開の拠点病院というシステムができます。公開されていないが、医療機関でHIVだとわかると、どここの病院で診療ができるかを教えてもらえるという仕組みです。保険制度のほうでも、診察料としてウイルス疾患指導料で月に3,300円、その後には専門のコーディネーターがいるとプラス2,200円というのが設けら



根岸氏

れ、ひとつひとつ医療機関の格付けが行われたわけです。

福祉制度については、血友病の方たちが、訴訟の和解条件で恒久対策として福祉制度を作るという大きな流れをつくってくれました。このとき、障害についてどういう風に考えるかが大きな論点でした。WHOで1960年代から議論されている課題で、国際障害分類というのが根拠となっていますが、それが厚生省の中で議論となって、ようやく認められて障害手帳につながりました。しかし、実際は今でもこういった概念がうまく消化されていないという状況があります。

●個々にあわせた医療の提供—その難しさ—

困っている人に、その原因を見つけて、どうしたら良い方向に行けるのかというのが医療で、それを裏付ける学問が医学です。そして、個々にあわせて技術を提供する場が必要だし、そういったアプローチができるようになってないといけない。これが私の持論です。最初に感染症科というところに勤めて、病気の社会性というところからどういうやり方をしたら良いかを考える姿勢はずっと変わっていません。

お薬があっても、その薬にかならずしもアクセスができない人がいます。経済的なことだったり、その病気に対する周囲の扱い方だったりということがあります。ところが、ひとつずつ異なる個別の例に対して事情を理解し工夫するという時間的な余裕、経済的余裕がないことが多い。ひとりの人が病気を持つと、身体的なアプローチが必要ですし、同時に心理的なアプローチが必要でも、そういったことが枠組みにない。他の医療の専門家と協力してやっていこうとか、盛んに医療連携ということも言われていますが、実際にそれができるのか、未だもって言葉だけしか出てこない。こういったことは20年経っても変わらないところです。

こうした中で、年齢が高くなってきたときに、この病気といっしょにどうやって暮らしていくのか、まわりの人がどう考え支えていくのか、その人が持っている可能性といったものをどう開発していくかということを考えています。今、医療や福祉、ケアを受けるための制度そのものが危機に瀕していると思います。

それから、ぷれいす東京が20年前に事務所を探すのが大変だったという話ですが、7年前に今の診療所を開くことなのです。女房といっしょに休みのたびに2年半くらい探しましたが、大手のところはすべて断られました。エイズの診療やりますと言ったら、そんなところに貸す人がいるんですか？という反応でした。そういう意味でも変わってないです。

おおきな進歩は、情報発信している人が増えたことです。Living Togetherで話される小さな個々の体験もそうですが、そこに光があると思っています。

樽井正義

●20年を振り返る—世界の動きをふまえて—

1990年代は、世界の状況は空白の10年と言われています。途上国での対応が不十分だったという批判と反省に立ってそう言われているわけです。また、先進国でもあからさまに差別があり、その代表的なのが入国規制です。アメリカは1992年にHIV陽性者の入国を禁ずるという法的措置をとりました。そのためにボストンの国際会議がアムステルダムに変更になったりしました。こういった規制は1989年のエイズ予防法により日本にもありましたから横浜でも大変だったわけです。HIV陽性者に対する差別的なシステムというのがきわめて強力に世界的にあったわけです。

1996年のバンクーバー国際エイズ会議は、途上国のエイズにとっても非常に重要なポイントとなりました。HAARTです。実はその2年前の横浜でも発表があり、でも、それほんとに効くんかいな？という感じだったのが、バンクーバーでは決定的な治療だということが確認され、宣伝されました。先進国にとっては大変よろこばしいことだったんですが、これが報告されたとたん、南北問題が浮上しました。豊かな先進国では薬が使えるけれども、貧しい途上国では使えないということです。この会議のスローガンは「One World One Hope」だったんです。治療が全くない時代にまさに運命共同体だったんですね。ところが、参加者が「Third World No Hope」と言い出したんです。先進国に希望はあるけれども、途上国には絶望しかない。ここでエイズは完全に南北問題になっていきました。

例えばアメリカでは死因のトップだったのがHAARTによる決定的な効果でドーンと大きく下がった。それを見て途上国も欲しくなるわけです。しかし、途上国にも薬をよこせという声が、ようやく形になって発信されたのがバンクーバーの4年後、南アフリカのダーバンの国際会議です。ここでの呼びかけに対して国際社会がついに反応しました。そして開催されたのがUNGASS、2001年の国連エイズ特別総会で、ここでの「コミットメント宣言」が世界をリードするようになります。2002年にはグローバルファンドができ、そして3by5。これは2005年末までに300万人に治療を提供しようということです。その頃せいぜい20万人だったのが、今は1,000万人を越えています。この10年の間にどれだけの変化があったかを知ることができます。

UNGASSの後に途上国に使われるエイズ対策費が急激に増えていきます。空白の90年代に、アフリカに対して何にもやってこなかった、アジアに対してもそうです。それがようやくUNGASSを機に変わっていったということです。そんな中で、2005年に神戸でICAAPが開かれました。この会議も、コミュニティにとっては大きな意味がありました。JaNP+が立ち上がり、APN+とつながりました。

世界的に見ると、1990年代の終わりにサブサハラを中心にようやく新規感染が減ってくる。そして2000年を

過ぎてから治療が途上国に広まり、エイズで亡くなる方の数が2005年からようやく減ってきます。このように2000年代にはエイズはグローバルな緊急課題になり、そして誰にも治療と予防が提供されるよう、それが世界の潮流になってきたわけです。ただ、持続的な対策をどうするかという、今我々がいる2010年代、正念場に立たされています。

エイズが世界の政治のヒノキ舞台にあがっていくのを後押しした1つが、国連のミレニアム開発目標です。21世紀の初めに、とにかく貧困をなくそうということで8つの柱を建てました。貧困対策の8つのうちの3つが保健で、そのうちの1つがHIVなど感染症です。しかし、これが有効なのは2015年まで。来年新しい目標に切り替えることになります。今出ている案だと8つが19になって、そのうち保健が1つだけになり、その一つの中にやっとHIVがある。つまり、HIVの重さが24分の1から、300分の1に小さくなるということです。国際政治の中でのエイズの重みがすごく下げられようとしています。この世界の動きと日本の動きはけっして無関係じゃないんです。この辺りのことをよく考えていかなければならないと思います。



樽井氏

●世界で何が大きく変わったか

大きな変化はやはり治療ができるようになったことです。横浜会議でNGOが最初に行ったイベントは灯籠流しでした。亡くなるということしか考えられなかったんです。それが2年後に治療ができるようになり、日本でも世界でも状況を変えました。ただ、治療をつくるのは医学の話ですけれども、それを使えるようにするというのは社会が関与する部分です。社会は何なのかというと私たちひとりひとりです。コミュニティのこの問題に関わるNGOやその他の人たちの関与、これは20年前にくらべたら、くらべものにならないです。コミュニティの活動の豊かさ。この20年間の活動の広がり、これはもう素晴らしいものです。これがあって治療が広がっていったわけです。医学が進歩しただけじゃだめなんです。わずか20万人が1,000万人を超えるところまで来た、これはこの問題に関心を持ったひとりひとりの力なわけです。それが結集したものです。

バンクーバーで象徴的なことがありました。アメリカとカナダのアクティビストがたくさん集まっていますが、彼らが主張していたのは、「薬をよこせ」ということだった。貧乏人でもエイズの薬を買えるようにしろと。特にアメリカは保険制度が貧弱なものですから。アクトアップのエリック・ソーヤーが開会式の前日に息巻いてました。「明日はあばれるぞ」って、「何としても薬もぎとるぞ」って。

その男に4年後のダーバンでも会いました。すでにアメリカでは薬を飲めるようになっていましたが、途上国に薬を持って来ないとどうしようもないって言って、その先頭に立っているんです。そういう人たちの動きがあったんです。何も国際会議で先頭に立つばかりじゃなく、コミュニティの様々な人がいて、様々な活動があって、その集大成として10年間に1,000万人に治療が届くようになっていったわけです。治療が変わりました、コミュニティの活動が変わりました。それをやっていったのは、私たちのひとりひとりですから、これからも私たちひとりひとりがやっていくしかない。ふれいすの20年周年にあたり、あらためてそう思います。

宮田一雄

●1990年代の東京とニューヨーク

横浜会議の2年前。日本の組織委員会には、純粋に医学的な会議にするんだという肩に力が入った意識があって、そのあまりにも見当外れな決意を伝え聞いた海外の国際エイズ会議関係者がびっくりしちゃった。WHOの世界エイズ計画のマイケル・マーソン部長と国際エイズ学会(IAS)のピーター・ピオット理事長が、組織委員会の山形操六事務局長(エイズ予防財団専務理事)に言ったんです。とにかく考え違いをしてもらっちゃ困る、この会議はコミュニティでエイズ対策の現場にいる人たち、HIVに感染している人たちが、積極的に参加できるものでないと成り立たない。それが嫌なら、横浜でなくバンコクでやってもかまわない。ボストンの会議だってアムステルダムに行ったわけだし、かなり強気の申し入れだったようで、状況を総合的に判断すると、日本にとっては自らの意識改革の契機になる比較的良好な外圧だったのではないかと思います。

二人の要求は、まず事務局と同格でコミュニティの参加を促進する受け入れ窓口を作ること。それがコミュニティ・リエゾン委員会でした。そして、そのリエゾンの代表に日本のHIVコミュニティを代表する人物を起用してほしいという条件が付けられた。プログラム委員会で山形さんは、実はこういう話があってとにかく、リエゾンは作ります、誰か代表的な人を起用しますと説明しました。山形さんにはそれ以前からエイズ対策のNGO関係者にも知り合いが多く、誰を起用すればいいのか、ある程度分かっていた。それで、池上さんをお願いしたいという提案があり、そう言われては文句も言えないな、誰が鈴つけるの?ということになり、私が密命を帯びて池上さんをお願いしに行きました。

神田のあまり高級とは言えない中華料理店で、ねえねえ、やってよ、池上さん、とお願いし、引き受けてくれたら一人だけ苦勞させるようなことはしないと調子のいいことと言って承諾を得ました。実際にリエゾン委員会のバックアップ委員会みたいなものも作り、カウンターパートの厚生省の担当者も理解のある人だったので、いよいよ動き出すぞということになった。その段階で私にはニューヨーク転勤の辞令が出てしまい「後はよろしく」ということで、みなさんの苦勞はどこ吹く風でニューヨー

クに行きました。まったく信用ならないやつなんですよ(笑)。



宮田氏

ということで1994年にぶれいすができたときはニューヨークにいました。この年に、ニューヨークではストーンウォール暴動25周年というのがありました。1969年にジュディ・ガーランドが亡くなり、ニューヨークのゲイコミュニティの人たちがみんなしんみりしていたときに、グリニッチビレッジのストーンウォールインという居酒屋に、警察の手入れがあった。こんなときに手入れするとは何事だということで、抵抗したり逮捕者が出たりして、3日間くらい大暴動が起きました。いわゆるゲイライツの大きなムーブメントのきっかけの事件です。それを記念する主催者発表100万人という大パレードに、私は取材だか好奇心だかわかんないけど南定四郎さんやアカーのメンバーと参加した。朝9時に最初のグループが発して夕方5時になってもまだパレードが終わらない。本当にたくさんの人が参加したパレードだったんです。

この年の7月には、国連で、WHOやUNDPやユニセフなんかバラバラにエイズ対策をするのではなく、共同でエイズプログラムを行おうという決議がありました。これがのちのUNAIDSになります。そして、8月に横浜会議があって、12月にパリエイズサミットがあり、GIPAが打ち出されました。GIPAの重要性は横浜会議の準備過程で認識され、その具体的な動きの見本みたいなものがコミュニティ・リエゾンで、なおかつ、それを契機に出発したのが、ぶれいす東京です。国際的にも素晴らしいことでした。

その頃、ニューヨークでゲイのアクティビストたちの中でどうしていたのかというと、完全に浮いていました(笑)。当時はアクトアップが毎週月曜日の夕方に開いていたジェネラルミーティングに毎回、300人くらい集まっています。でも、1996年の冬くらいには20人くらいになっていた。HAARTが効くことが分かりだし、関心が治療のほうに行っちゃったかなという感じです。

エイズ対策の基本的な考え方は、1980年代の初めからゲイコミュニティが、それこそ血と涙の中で作り上げていった。たとえばGIPAもそうだし、セーファーセックスもそうです。感染しているやつはセックスなんかしなきゃいいんだと言われるような中で、ほんとうにそうなんだろうか？ということで一生懸命考えて生まれたのがセーファーセックスという思想です。あるいは“Living with HIV” HIVとともに生きるという考え方もそう。そういったものを必死に生み出して、それが我々のエイズ対策の大きな財産として継承されている。ほんとうに今でも足向けて眠れないですよ。いまだにホモフォビアは

強いけれど、ゲイの人たちには好印象を持っている、おじさんとしてはそんな感覚です。

●HIV/エイズとメディア～変わったこと変わらないこと

私は新聞記者なので、報道とかメディアに関わる観点で少し話したいと思います。

HIV/エイズの流行というのは非常に長い現象ですよ。1980年代から30数年経っているわけです。その中で、HIV/エイズ対策としてかなり大きく変わったことがあります。いわゆる「脅しの対策」というものが初期にはかなり強かった。感染爆発しちゃうぞとか、セックスばかりやってると感染しちゃうぞとか。感染したら人間として生きていけなくて、死んだ方がましとまで言われるほどの脅しで、予防の成果をあげようとしてきた。それに対して、別の考え方を示した。HIVに感染した人が社会の中で生きている。その現実を踏まえて対策を組み立てていく。それが予防にもつながる、自分は何を防ごうとしているのかというリアリティも持てるようになる。まさにLiving Togetherの考え方だし、ぶれいす東京の考え方だし、そういったものが長いタームで見るとかなり浸透してきている。そういう意味で、ぶれいす東京やJaNP+やaktaの活動は非常に大きかった、決して小さいものではないと思います。

変わらないのは、例えば、2003年SARSの流行、2009年H1N1の新型インフルエンザの流行のときのこと。小流行であっても社会のあのオタオタ振りは何なのという感じ。これってHIV/エイズの最初のころと全然変わってないじゃないかって。SARSの場合、日本でひとりも感染していないのに、大騒ぎになり、地下鉄まで消毒してまわっていたし、新型インフルエンザだって特定の高校の高校生は街を歩けないような雰囲気になるとか、こうした反応はあまり変わってないなと思います。

私は国内のHIV/エイズの流行の比較的、早い段階で報道にあたっていたので、そのときのメディア的な状況に対する違和感を持つことになったし、長く続く現象として継続してHIV/エイズの報道に関わっていくこともできた。しかし、HIV/エイズに対する関心が大きく低下している今、もしかしたらそういう感受性すら低下してしまうということもあるかもしれません。その中で、Living Togetherとか予防と支援の両立とか言っていると、どこかで激しい反作用がおきるかもしれない。社会ってどうころがるか分からないということを頭におきながら、やはり関心が低下しないように発信はしていかなければいけないなと思います。



会場遠景

The Tokyo HIV Peer Support (東京HIVピア・サポート)

～英語を話すHIV陽性者のためのピア・ミーティング～

東京に住む英語を話すHIV陽性者のためのピア・ミーティングが欲しいという声は、以前よりぶれいす東京にも寄せられていました。そんな中、ピア・ミーティングの運営スキルをもつHIV陽性者からミーティング開催の応援要請があり、立ち上げ支援を行い、3月29日に第1回目のミーティングが開催されました。

オーストラリアの HIV陽性者団体、PLWHA Victoria で“感染が分かって間もない人々に対するサポートプログラム (Phoenix)” のファシリテーターを務めていた A さん(仮名)が本業の関係で 3 年前に来日。日本の医療機関を受診した A さんは、HIV に関する話をするに消極的な日本の環境と、よりフランクに話せる母国オーストラリアとの違いを実感。これが、日本在住の外国人 HIV 陽性者向けに新たな英語ミーティングを立ち上げるきっかけとなりました。

内容は“Phoenix”をベースに、日本の事情に合うよう独自にアレンジ。オーストラリア側の協力も仰ぎ、それぞれの参加者が自分たちの経験や知識を気軽に共有できる“語らいの場”を生み出すことができました。

当初は、日本で HIV 陽性者となつたのが難しく、参加者の募集にも苦労したようですが、「それぞれが少しずつ心を開き、結果的につながることができました」と A

さん。初回の反響も上々で、アンケートでも“自分は社会の中で孤独な存在と思ひ、外に出るのが怖かったが、他の人々とのつながりを通し自分に再び自信が持てた”などの意見が寄せられました。はるか海を隔てたもうひとつの国でも、A さんは新たな手ごたえを感じているようです。(翻訳・再構成：羽鳥、生島)



The Tokyo HIV Peer Support(東京HIVピア・サポート)

URL: <http://www.peersupporttokyo.com/>

問い合わせ: info@peersupporttokyo.com (英語のみ対応)

ネスト・プログラム

さまざまなネスト・プログラムの中から、「シリーズ“専門家と話そう”」、「ベーシック講座『HIVってどんな病気?』」、「アサーティブ・コミュニケーション」の参加者の感想文をお届けします。

シリーズ“専門家と話そう” 第13回「歯科医と話そうⅡ」

HIV をとりまくさまざまな専門家を招いてお話をしてもらうこのシリーズの第13回目となる「歯科医と話そうⅡ」が6月11日に行われました。ゲストは、東京HIVデンタルネットワーク代表の鈴木治仁さん(鈴木歯科クリニック院長)と副代表の澤 悦夫さん(澤歯科医院院長)のお二人。参加者は10名+オブザーバーの医療従事者1名でした。参加者の感想文をお届けします。

参加感想文

「歯科治療や掛かりつけ医の大切さを改めて知る」

しゅう(感染告知から10年半/服薬歴5ヶ月/男/ゲイ/40代)

今回初めて「専門家と話そう」に参加させて頂きました。僕は感染発覚直後の10年程前に前々からやりたかった親知らずの抜歯を、通院している拠点病院で2本それぞれやりました。抜歯はかなりの出血を伴うので、相手に感染させてしまう事や逆に自分が何かに感染してしまう恐れもあります。

幸い感染発覚直後から通院している拠点病院の歯科がHIV感染症に慣れた環境で内科との連携もよくスムーズに行う事が出来ました。しかし、通常の歯科検診や歯のクリーニング等は時間が有る時はいいのですが、病院までの距離や待ち時間等の兼ね合いもあって普段通院している拠点病院でばかり通院出来ない事もあるでしょう。また拠点病院によっては歯科でHIV感染症はダメという病院もあったりするでしょう。そのような場合、近くの開業医による掛かりつけ医の存在が重要になってくると思われませんが、その時やはりHIV感染症の事を告げるべきかとても悩みます。また、医師との相性等いろいろ考える事もあるでしょう。東京はもとより、地方ではプライバシーの問題や状況が全く違っていたり……。

そのあたりの事を今回掘り下げていろいろお話して下さい、とても参考になりました。また、僕はこの「歯科医と話そう」に参加して初めて、抗HIV薬の副作用としてドライマウスになり易い事を知りました。そう言えば最近そんな感じが……。ドライマウスだと、とにかく虫歯になり易く進行も速いので、寝る前の歯磨きが特に重要である事や、昼間もなるべくドライマウスにならないようにガムを噛んだりマッサージなどで唾液の分泌を良くす

る等、意識し注意する大切さを学びました。

最後に、感染発覚から10年半が経とうとしていますが、自分なりにあれこれ勉強したつもりでしたが、お話を聞かせて頂いてまだまだ知らない事の多さや違った角度での考え方が有る事に気付かされました。またこのような講座に是非参加させて頂きたいです。

「その器具キレイ!？」 おさむ (2005年告知/40代)

東京HIVデンタルネットワークの歯医者さんのお話は、日本のHIV/AIDSの治療の歴史と同じように、初期の治療の困難さと、陽性者、支援者との出会いが環境を変えて行った事を話されました。でも、依然として偏見を持つ医療者が少なくない事、特に年長の世代で偏見が根深く、治療器具の取り扱いにもばらつきが有る事は残念ながら、歯科医にとどまらないのではないかと思います。治療器具の先端を取り外して消毒している歯医者は良心的で、使いまわしている歯医者はダメだとの事でしたが、それは薬物の回しうちよりも怖い事ではないかと思います。ノロウイルスなど、飛沫感染の可能性のある病原体の存在などを考えれば、歯科医院の衛生面の努力は、惜しむ事は出来ないだろうと思いました。

「現在の開業歯科医さん達の取り組み」

YASUNORI (40代/Gay/感染歴18年/投薬歴2年半)

僕が感染発覚当初の歯科医院は大阪で拠点病院から紹介された一カ所梅田にしかありませんでした。その当時はHIV/AIDSの患者といえば一番奥の椅子に座らせられ次々と歯科医さん達やアシスタントさん達が珍しいものを覗きにくるような状態で、医師の着衣も手術をするように全身フルフェイスのようでした。僕の現在通っている歯科は東京HIVデンタルネットワークに所属されてる歯科医師です。

今日鈴木治仁先生と澤悦夫先生に現在の歯科のネットワークや歯科医の知識を深めようとされてる活動に少しほっとしました。まだまだ地方や集落では東京のようにHIV/AIDSの歯科治療は大変難しい面もあると思いますが、両先生がお話になられてたようにどんな病気も一緒に院内感染だけではなく、口腔内感染から色んなものが感染する、酷くなる事に違いが無く、医師側も最善の注意や知識を高めて行っていると話になられてた事が印象的でした。感染当時歯を一番に治療しようという内容は口から血が出た感染予防や、歯から雑菌等が入り色んな影響が出るとだけ聞かされてたものから、現在は歯を大事にしないと色んな副産物をおこしてしまうから治そう、治療に通おうと幅が広がっていた事に納得もしながらびっくりしました。

僕はこの15年間で東京都内の拠点病院から紹介された通った歯科医は5軒になりますが、ようやくある歯科医院で落ち着いて歯の治療をしています。その先生が属するネットワークの代表の方のお話が聞けて、まだまだ東京でも少ない歯科医しかちゃんと受診出来ない状態は哀しい面もありますが、そこまで辿り着くまでの大変さを少し垣間見れた気がしました。

話は変わってドロップアウトされてるHIV感染者がよく話す事なのですが東京でもやはり歯医者でHIVだという事を話すのは抵抗があり、差別されてる気がするとい

うのは多く聞きます。かといって僕の場合言わない方が薬とか体調とか変なバッチングをするのではないかと昔から感じていました。そういう方々にはある歯科医院があるよと話してあげて、今でも安心され通院されてる方々も居ます。医療従事者さん達の取り組みは日進月歩で変わって行ってる中、陽性者が増える一方で勇気が出せず前に進めず歯科医でちゃんと病気の事が話せない人は昔から現在に至っても沢山居ます。東京HIVデンタルネットワークのみなさんのように、医者と患者でコミュニケーションを取りながら治療して行こうと言われる先生が増えているという事を一陽性者側からも広めて行きたいです。

ベーシック講座「HIVってどんな病気？」

ぶれいす東京のスタッフがHIV陽性者向けにHIVの基礎知識を解説するシリーズ。わかりやすいと評判の新陽性者PGMの「医療情報セッション」が、ベーシック講座でも行われることになりました。参加者とスタッフの感想文をお届けします。

参加者より

「HIVについておさらいと情報収集を兼ねて・・・」

しゅう (40代/男/ゲイ/感染告知年2003年/服薬歴5ヶ月)

僕は早いもので感染発覚から約10年半が経過し、投薬開始から5ヶ月目に入ったばかりです。今回このようなベーシック講座があり、僕自身は随分年数が経ってしまっていますが、感染発覚直後に新陽性者向けPGMに参加出来なかった事とおさらいの意味で興味が有り、気軽に参加出来るということで参加させて頂きました。

自分なりに発覚直後はもちろん、今でも時々思い出した感じでネットや資料で最近の動向なり知識の勉強はしていたつもりですが、新しい情報や知らなかった事が意外にあるもので良い勉強になりました。

特に僕は投薬開始からまだ5ヶ月目で、投薬開始時に主治医から自分が服用する薬の説明がもちろんありましたが、自分が飲んでいる以外の薬や多剤併用療法耐性のしくみや耐性についてさらに理解が深まりました。

通常の診察時は次の患者さんが待っているなど時間的な制約があったり、一対一だと聞きづらい事なんかもあったりでこの講座でそこら辺の説明もあったりで参加して良かったです。

抗HIV薬も日々進歩し、HIVという病気に関してもいろいろな事が発見されたり分かってきたり、人それぞれだと思いますがそういった情報収集の意味なんかでもこういった講座に参加してみたいかながらでしょうか？

スタッフより

「六尺ってこんな感じ？」

福原寿弥

長年、新陽性者PGMの医療情報セッションにおいて、講師をさせて頂いています。告知後間もない陽性者の方々に、まずは知っておいていただきたいHIVの医学的基礎知識について説明し、情報を整理していただいた上で、今後の診療に役立てていただくことを目的としています。

かなり前のことですが、“ぶれいす”の他のサービスを

ご利用いただいていたある陽性者の方から、自分はPGMの参加資格が無かったが、是非そこでやっている医療情報のお話を聞いてみたい！という要望を受けたことがあり、一度だけそのような機会を設けたことがありました。理由はともあれ、それ以降継続することはなかったのですが、今回「ベーシック講座」というプログラムのひとつとして、久々に復活することとなりました。すでに社会福祉制度について開講されていたところへの仲間入りです。あくまで「ベーシック」ということで、あまりに専門的なお話には、実力不足で対応できないかと思いますが、少しでも参考にしていただければと考えています。今回参加された方からも、貴重なご意見をいただきましたので、今後につなげていければと、痺を締め直しているところです。

アサーティブ・コミュニケーション ～自己表現のABC～ 第4期

相手も自分も大切に自己表現＝アサーティブなコミュニケーションを身につけるための、2回構成のワークショップ形式の講座です。第4期目が6月28日、29日に行われました。参加者より4名の感想文をお届けします。

参加者より

「相手も大事、自分も大事」

モト (30代/ゲイ/服薬歴9年)

この講座に参加して、普段なにげなく交わしている会話の中でどれくらい自分自身を表現できているのだろうというのを振り返るいい機会になりました。

相手の意見に合わせ過ぎてハッキリ自分の意見を言えないその一方で心の中ではモヤモヤしていたり、上手く伝えることが出来なくてイライラが態度に出てしまったり…。自分の感情 (特にネガティブな感情) はあまり表に出さない方が何事もうまく行くとはい込んで今まで人と接してきましたが、実はそうではなかったのかもしれない。ハッキリさせないことによって逆に相手を不安な気持ちにさせてしまっていた場合もあったのではないかと今になって思います。

歩み寄り、気持ちを理解し合い、また意思表示をきちんと示した上で信頼関係を築いて行く。そんなコミュニケーションの取り方をこれからは実践して行きたいです。人生一度きりですから。

「我慢するだけじゃない双方向のコミュニケーション」

かず (40代男性/ゲイ/服薬歴10年以上)

何となく自己啓発的な感じがして敬遠していましたが、上手な自己表現の方法を学ぶということで、いろいろ断れない自分には良いかも…とおっかなびっくり参加してみました。

2日間参加して、「アサーティブ・コミュニケーション」の考え方は、当初考えていたよりずっと実際の、かつ技術的なものだと思います。今回は参加者それぞれが実際に抱えている悩みを題材に、皆でロールプレイ (役割を演じる) を実施、観察、フィードバックし合いました。ロールプレイでは照れを捨て、持てる限りの想像力、演技力をフル稼働させたためヘトヘトになりましたが、伝えたいことを明確に、一貫した軸を持って、論理的に、かつ相手の気

持ちに寄り添いながら主張を展開していく、簡単ではないですが、その方法は実際の納得できるものでした。

同じ内容を伝えるにしても、話の順序や言葉の選び方一つで、相手が受ける印象は随分と違うものになると分かりました。

「2度目の参加を終えて」

タカ (30代/感染告知2007年)

「2度目も参加してよかった！」これが今回の参加を終えての率直な感想です。今回2度目の参加を希望した理由は、自分にはどれくらいコミュニケーション力が定着し、また今の自分にはまだ何が足りないのかを確認したかったからです。

数年前に人生の挫折を経験し、それ以来家に引きこもりがちになっていました。生島さんとの面談が数少ないコミュニケーションだったように思います。そんな状況の中でアサーティブ・コミュニケーションの参加を勧めてもらい、去年初めて参加しました。初回では緊張続きで自分の意見をうまく発信することもできず、ただただ参加しているだけで精いっぱいでした。

そして今回の2回目。やはり初めは緊張しましたが、気が付いたら前回と比べてとても落ち着いて参加することができていました。これは自分の中で大きな成長だと強く実感することができました。そして前回よりもできた事、分かった事が増えたことにより、自信にも繋がりました。いつも自己否定ばかりしていた自分を自己肯定してあげられるよききっかけになりました。

今回学んだことを意識して、もっともっと自分に素直に誠実に生きていけるようになりたいと思いました。ありがとうございました。

「いい人からの卒業への一步」

グリーンアイ (40代)

私は4人兄弟の長男として生まれ、幼いころから厳格な両親に育てられたせいか、いつも我慢して自分の気持ちにフタをしていました。そのため、成人となっていくいろいろな人間関係の中でも『いい人でなければいけない』という思いがあり上手く自分の思いを伝えることができませんでした。

家族・友人・職場の人間関係などに対して、我慢して・我慢して…結局は我慢の限界になり、爆発して周りの人が消えていく、そんな繰り返しの日々を送っていました。その時は、いつも『自分はこんなにやっているのに』『どうしてわかってくれないのか』と相手を非難することばかりで悩ま苦しんでいました。

今回このプログラムに参加して、言い方ひとつ・伝え方ひとつでこんなにも自分の思いが伝わることを知り、目からウロコ状態の2日間でした。相手にどう伝えるか？ 事実・感情・要求・提案の順序を組み立てて相手を責めずに伝えることにより、自分の気持ちの中のモヤモヤ感や葛藤がなくなり、穏やかな気持ちでいられることが何よりの収穫でした。

また、このアサーティブネスは、職場・家族・友人関係だけでなく生活の中でのいろいろな場面でも活用できるなとも思いました。40数年間の中で染みついた自分の性格はそんなにすぐには変わらないとは思いますが、もう自分の中ではいい人であることは卒業だと思っています。

「職場とHIV/エイズハンドブック」 ～HIV陽性者とともに働くみなさまへ」PDF版 発行

企業などで働く人にHIV/エイズの現状を正しく知ってもらい、職場でHIV陽性者への理解が深まり、誰にとっても働きやすい職場づくりが進むことを目的として作成されたハンドブックのPDF版が発行されました。(発行：東京都福祉保健局／編集協力：ぶれいす東京)

「職場とHIV/エイズハンドブック」第2弾

HIV陽性者の多くは十分に働くことのできる状態にあります。旧来のイメージによる誤解や偏見のために、働きにくさを感じていることも少なくありません。また、HIV/エイズに限らず、何らかの病気をもつ人にとって働きやすい職場と言えます。そこで、「職場とHIV/エイズハンドブック」第2弾として、HIV陽性者とともに働く人々向けの冊子が作成されました。PDF版冊子をプリントアウトしてご活用ください。

<http://www.metro.tokyo.jp/INET/OSHIRASE/2014/07/DATA/20o78100.pdf>



- ・はじめに
- ・HIV陽性者の現在
HIV陽性者と仕事・就労時間／HIV/エイズの治療は日進月歩／HIV陽性者にとって通院は不可欠／障害者認定を受けて医療費助成
- ・HIV陽性者と職場
①日常生活では感染しません ②特別扱いは不要です ③プライバシーには配慮してください ④理解を深めたい！もっと知りたいときは？
- ・HIV陽性者の声
感染がわかったときに感じたこと／仕事と療養生活との両立／仕事とプライベートのバランス／雇用主の対応でよかったこと
- ・HIV陽性者と一緒に働くなかで
HIV/エイズの基礎知識Q&A
- ・ともに働く人たちの声
感染を聞いたときに感じたこと／HIV陽性者と職場で一緒に働いてみて感じたこと
- ・福祉・医療・生活の情報
HIV/エイズ診療について／身体障害者手帳について／働くことについて／相談窓口一覧

「とも・ナビweb」オープン！ <http://www.janppplus.jp/tomonavi/>

健康に暮らしたいHIV陽性者のセルフケアを応援するサイト「とも・ナビweb」が開設されました。
(制作・運営：ぶれいす東京／日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス 監修：セルフマネジメント研究会
協賛：ヴィーブヘルスケア株式会社)

HIVは慢性疾患に近い病気になり、生活上の課題を早く見つけてうまくHIVと付き合いながら健康的な暮らしをすることが可能になりました。このWEBサイトでは、治療と生活に関する基本的なアドバイスと、HIV陽性者が自らの健康について考えるきっかけを提供しています。



主なコンテンツ

●とも・ナビch

HIV診療の現場で活躍する専門家からのメッセージを映像で届けるコーナー。現在2名の医師からのメッセージが収載されています。

「HIVとうまくつきあっていくために」 今村顕史医師
「服薬がうまくいかない時は」 今村顕史医師
「陽性とわかったばかりのあなたへ」 加藤哲朗医師

●セルフチェック

自分の健康状態や生活環境についてチェックすると、回答に応じたアドバイスが表示されます。治療と生活が安定している人、何となく不調を感じている人、日ごろストレスを感じている人、様々なHIV陽性者に役立ちます。

部門報告 (2014年4～6月)



ホットライン

HIV/エイズ電話相談(ぶれいす東京および東京都委託)

相談実績報告

—ぶれいす東京HIV/エイズ電話相談—

	4月	5月	6月
日 数(日)	4	4	5
総 時 間(時間)	16	16	20
相談員数(延べ人)	4.5	5.0	6.0
相談件数(件)	34	40	49
うち(男性)	33	33	45
(女性)	1	7	4
(不明)	0	0	0
陽性者相談	1	0	2
要確認相談	0	0	0
1日平均(件)	8.5	10.0	9.8

—東京都HIV/エイズ電話相談(夜間・休日)—[委託]

	4月	5月	6月
日 数(日)	12	14	13
総 時 間(時間)	36	42	39
相談員数(延べ人)	28.5	34	30
相談件数(件)	148	199	211
うち(男性)	104	144	152
(女性)	44	55	58
(不明)	0	0	1
陽性者相談	1	6	3
要確認相談	1	0	0
1日平均(件)	12.3	14.2	16.2

ホットライン部門・活動状況 ()内は出席人数

スタッフミーティング

4/20(10名) 5/18(13名) 6/15(11名)

世話人会

4/20(5名) 5/18(6名) 6/15(5名)

個別ミーティング

4/25(3名) 5/10(3名) 5/11(3名)

東京都電話相談連絡会

4/18(3名) 5/9(3名) 6/13(3名)

東京都ボランティア講習会

6/6(4名)

新年度を迎え、徐々にではありますが、東京都の相談件数が回復してきました。50代以上の発症者が増加していることなど、話題として取り上げられることが、増えていることに起因しているかもしれません。ひとりひとり丁寧に対応したいと思っています。

(報告：佐藤)



バディ

陽性者のための直接ケア・派遣プログラム

バディ担当者ミーティング(4-6月実績)

4/3 : 中止 4/17 : 4名
5/3 : 3名 5/15 : 4名
6/5 : 中止 6/19 : 6名
※ 個別ミーティング 5件

利用者数

8カ所の医療機関に通院中の18名の方に20名のバディスタッフを派遣

活動内容(2014年6月末現在)

派遣継続中 18件
在宅訪問 18件
病室訪問 0件
派遣休止 5件

4月～6月中の動き

・新規派遣・相談 2件
・派遣調整 17件

今後のミーティング日程

午前ミーティング:

偶数月第1木曜 11:00 / 奇数月第1土曜 11:00

8/7(木) 9/6(土) 10/2(木)

※木曜は参加者がある場合のみ開催。事前にご連絡下さい。

午後ミーティング: 毎月 第3木曜 19:00

8/21(木) 9/18(木) 10/16(木)

バディの現場から

新規派遣の相談が2件ありました。1件は看護師からの問い合わせで通院の付き添いの依頼、1件は車椅子利用者の在宅での支援です。両ケースともに7月から担当も決まり派遣が開始される予定です。

5/25の活動報告会のボランティア表彰にて、バディから4名が表彰となりました。10年以上、バディ活動を継続している方々です。本当にありがとうございます。今後もよろしくお願いします。

(報告：牧原)



ネスト

陽性者とパートナー・家族のためのプログラム

ネスト・プログラム参加状況(2014年4-6月)

グループ・ミーティング

・新陽性者ピア・グループ・ミーティング(PGM)第73期(参加者6名)

4/5 4/19 5/10 5/24(修了)

・新陽性者ピア・グループ・ミーティング(PGM)第74期(参加者6名)

6/13 6/27

- ・ミドル・ミーティング
4/12 (30名) 5/10 (24名) 6/14 (33名)
- ・異性愛者のための交流ミーティング
4/18 (14名、ピア・ファシリテーター2名)
5/24 (17名、2名) 6/20 (12名、2名)
- ・Women's Salon
6/7 (5名)
- ・陰性パートナー・ミーティング
4/5 (4名) 6/7 (9名)
- ・もめんの会 (HIV/AIDS を支える母親の会)
6/17 (3名)

学習会

- ・シリーズ“専門家と話そう”第13回「歯科医と話そうⅡ」
ゲスト 鈴木治仁さん (鈴木歯科クリニック院長／東京HIVデンタルネットワーク代表)
澤 悦夫さん (澤歯科医院院長／東京HIVデンタルネットワーク副代表)
6/11 (10名、オブザーバーの医療従事者1名)
- ・ベーシック講座「HIVってどんな病気？」
6/21 (4名)
- ・ストレス・マネジメント講座 第22期
5/26 (6名) 6/30 (8名)
- ・アサーティブ・コミュニケーション 自己表現のABC 第3期
6/28 (7名) 6/29 (6名)

トークサロン

- ・就職活動を報告しあう会
4/19 (6名) 5/28 (6名) 6/21 (7名)
- ・介護職として働く陽性者のミーティング
4/22 (5名) 6/17 (3名)
- ・看護師として働く陽性者のミーティング
5/17 (3名)

ミーティング(陽性者メンバー、ぷれいす東京スタッフほか)

- ・新陽性者PGMファシリテーター・ミーティング
第73期振り返り 6/4 (4名、8名)
- ・web NEST運営委員会
4/14 (2名、2名) 6/23 (2名、2名)

ピア・ファシリテーターによるプログラム等(厚生労働省委託事業)

- ・U40 (アンダー・フォーティ)ミーティング
～10代から30代の男性HIV陽性者のミーティング～
4/21 (参加者10名、ピア・ファシリテーター2名)
5/28 (11名、2名) 6/23 (5名、1名)
- ・セクレタリー(17回 19名)
- ・ピア・ファシリテーター(6回 12名)

ネスト・ニュースレター

4/3：4月号発行 5/8：5月号発行
6/5：6月号発行

ベーシック講座「HIVってどんな病気？」開講

ベーシック講座に「社会福祉制度」に加えて、医療情報の

講座が加わりました。わかりやすいと評判の新陽性者PGMの「医療情報セッション」の出前講座です。基本的なHIV/エイズの知識についておさらいします。(P.13参照)

今回は1月に開催予定です。(報告：佐藤、加藤、はらだ)



Gay Friends for AIDS

ゲイによるゲイ・コミュニティ向け活動 <http://gf.ptokyo.org/>

Gay Friends for AIDS 電話相談

4月 12件 (1日平均3.00件)
5月 10件 (1日平均2.00件)
6月 9件 (1日平均2.25件)

聴覚障がい者向けのメール相談対応

4月：0件 5月：0件 6月：0件

Tokyo Rainbow Week

今年もゴールデンウィークは「Tokyo Rainbow Week」として様々なイベントが開催されました。Gフレメンバーは4/27のパレードや4/29のぷれいす東京20周年シンポジウムでスタッフとして参加しました。

QOGL vol.4「禁煙しないとダメですか？」

5/17(土)19時より、新宿区戸塚地域センターにて「QOGL ～Quality of Gay Life vol.4 タバコ編」を開催しました。

当日の様子は5～6ページのレポートをご覧ください。



フライヤーイラストは村田ボコさん

NLGR+2014

毎年6月に開催される、名古屋の恒例イベントNLGR+。今年はカレンダーの関係もあって5/31～6/1とやや早めの開催でしたが、30度を軽く超える猛暑の中の開催となりました。

今年も、魅惑的倶楽部さんをはじめとする東海地区のNGOの皆さんと共に、各地の取り組みを紹介するCBOブースに参加。ぷれいす東京としては今年は20周年のロゴマーク入りのパンフレットを中心に配布しました。当日スタッフがお世話になった皆様には改めて感謝申し上げます。(報告：sakura)



HIV陽性者への相談サービス

相談実績2014年4～6月

	4月	5月	6月
電話による相談	119	112	108
対面による相談	53	49	46
E-mailによる相談等	105	95	67
うち新規相談	27	19	30

※メール新規は含まず

4～6月の新規相談者の属性 (N=76)

陽性者： 46人（男性：43 女性：3）
パートナー： 8人（男性：7 女性：1）
家族： 3人（男性：1 女性：2）
専門家： 8人（男性：2 女性：6）
判定保留： 2人（男性：2 女性：0）
その他： 9人（男性：5 女性：4）

4～6月新規相談者の情報源 (N=76)

WEB (PC/携帯サイト含) : 32件
医療関係 (Dr.、Ns.、MSW、クリニックなど) : 12件
冊子/パンフレット/チラシ : 9件
人的ネットワーク (家族、本人、パートナー他) : 7件
カウンセラー : 4件
保健所/検査所 : 2件
他団体 (NPO/NGO) : 2件
以前から知っていた : 2件
エイズ電話相談 (財団/東京都/ふれいす等) : 1件
不明 : 5件

4～6月新規相談の内容 (複数回答あり)

【ふれいす東京のサービス利用、積極的参加等】

- ・利用登録×12
新陽性者PGM×7、ストレスマネジメント×1、医療職×1、異性愛者×1、陰性パートナー×1、トークサロン (看護職)×1
- ・新陽性者PGMの問い合わせ
- ・外国人、勉強会や他の陽性者と話してみたい
- ・他団体のイベントの問い合わせ

【検査や告知に関する相談】〔北海道/東北〕

- ＜判定保留/確認検査待ち＞
 - ・(判定保留)健康診断のオプション、確認検査待ちの不安
 - ・(判定保留)即日検査で判明、確認検査待ちの不安

【告知直後の漠然とした不安】〔北海道/東北、東海、中国/四国〕

- ・告知直後の不安や混乱 × 2
- ・医療職への就学、結婚や出産
- ・外国人、通知後のパートナーの混乱/強迫
- ・障害年金や手帳の取得
- ・精神疾患あり、就労や寿命
- ・発症で判明だが、すぐに転居予定、転院や就労継続の不安
- ・発症で入院中、会社への説明、就労の継続
- ・医療職、まさか自分になるとは
- ・周囲に未通知、今後の通知、プライバシー不安

【対人関係に関する相談】〔中国/四国〕

- ・家族とのトラブル
- ・今後の人間関係の形成
- ・家族からの虐待
- ・人間関係の閉塞感
- ・薬物で逮捕時の留置所での対応について

【生活に関する相談】〔甲信越/北陸〕

- ・生活保護の受給 ×2
- ・生命保険の継続、更新について ×2

- ・地方からの転居

【就労に関する相談】〔東海、中国/四国〕

- ・医療職、就労先への通知、継続 ×2
- ・医療系学生、就職先への通知
- ・福祉職、病名通知後の会社とのトラブル
- ・会社への通知、健康保険の使用
- ・退院後の就労
- ・今後の就職活動

【医療体制や受診に関する相談】〔近畿〕

- ・出張中の医療機関の受診
- ・12年前に判明し未通院、今後の通院、医療機関の選択

【病気や病態の変化、服薬】〔甲信越/北陸、九州/沖縄〕

- ・感染曝露の可能性のあるパートナーの内服について
- ・服薬開始2日目、副作用の対処

【心理や精神に関する問題】

- ・薬物依存×2
- ・精神疾患との付き合い方と人間関係の閉塞感
- ・がんばりすぎて疲れた、気持ちが落ち込む

【周囲の人からの相談】〔甲信越/北陸、中国/四国〕

＜パートナー/配偶者＞

- ・(陰バ)通知後の混乱、今後の付き合い ×2
- ・(陰バ)パートナーがふさぎ込みがち、支援について
- ・(陰バ)通知後の混乱、子づくりや寿命
- ・(陰バ)パートナーの体調不良、不安定な通院状況
- ・(陰バ)話せる場所がない。誰かの役にたきたい。
- ・(陰バ)パートナーが陽性と判明、自分の感染不安
- ・(元パートナー) 通知を受けての混乱、今後の支援

＜家族(親、兄弟)/親戚＞

- ・(きょうだい)身体に障害のあるきょうだいの入所先 ×2
- ・(きょうだい)通知後の混乱、副作用について
- ・(家族)手術はできるか

＜その他＞

- ・(友人) 通知を受けての混乱、今後の寿命や生活
- ・(友人) 友人が入院中の医療機関の対応
- ・(友人) 面談に同行
- ・(同僚) 職場の同僚が判明、今後の感染不安
- ・(判定保留のパートナー)検査の信憑性、今後の生活
- ・(陰性パートナーの家族)周囲への話にくさ、今後の結婚

＜専門家＞

- ・(MSW)生活保護での転居、障害のある方の在宅生活
- ・(企業保健師)今後の復職時の対応
- ・(企業人事)就職支援セミナーの参加希望
- ・(拠点医師)通訳の情報がほしい
- ・(訪問看護) 障害がある方の転居、転居先での支援
- ・(MSW)入院中の方の入所施設、転院先等について
- ・(ハローワーク)免疫機能障害者の就労支援、就労先への理解を促す資料が欲しい
- ・(地域活動支援センター)精神障害もある方の就労支援等

(報告：牧原／生島／福原)



研究・研修部門

研究事業

厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業「地域においてHIV陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究」

(研究代表者：樽井正義)

- ・ 4月18日：平成26年度交付申請書を提出。
- ・ 4月22日：研究会議を開催（於：ぷれいす東京）。参加者4名。
- ・ 5月30日：平成25年度総括・分担研究報告書および実績報告書を厚生労働省に提出。
- ・ 6月23日：平成25年度総括・分担研究報告書を配布開始。

「地域におけるHIV陽性者等支援のためのウェブサイト」(<http://www.chiiki-shien.jp/>)で、研究報告書のPDFを閲覧・ダウンロードいただけます。



地域における
HIV陽性者等支援のための
ウェブサイト

平成25年度 総括・分担研究報告書

研修事業

受託研修協力

- ・ 6月28日～29日：青年海外協力隊エイズ対策技術補完研修（シェア＝国際保健協力市民の会主催）に運営協力。参加者8名。

その他の講師派遣・研修

- ・ 4月11日：映画「トークバック」トークショーにて講演。参加者55名。
- ・ 4月26日：法律トークショー「こんなときどうする？よくある法律トラブル7選」にて講演。参加者50名。
- ・ 6月6日：東京都エイズ・ボランティア講習会にて講演。参加者31名。
- ・ 6月8日：映画「トークバック」トークショーにて講演。参加者30名。
- ・ 6月15日：視野を広げる反貧困ネットワークセミナー「こんな切り口もありじゃない？「制度があっても使えない？セクシュアル・マイノリティから見る貧困問題」(主催：反貧困ネットワーク)を企画・共催。参加者120名。(詳しくはP.6をご参照ください。)



120人を超える参加者で
会場は満員

- ・ 6月16日：東京弁護士会・両性の平等委員会にて講演。参加者21名。
- ・ 6月24日：東京都保健所研修会にて講演。参加者18名。
(報告：生島・牧原・大槻)

【重要】アドレス変更のお知らせ

「com」から「org」に変更になります

■メールアドレスの変更

ぷれいす東京が利用しているメールアドレスを
6月23日より変更しました。

例：office@ptokyo.com

→ office@ptokyo.org

同様にスタッフが利用しているメールアドレスも変更になりました。

※携帯電話などで迷惑メール対策のためドメイン指定をされている方は、「ptokyo.org」が受信できるように設定の変更をお願いいたします。

■WebサイトのURL変更

ぷれいす東京Webサイト

<http://www.ptokyo.com/>

→ <http://www.ptokyo.org/>

web NEST

<http://web-nest.ptokyo.com/>

→ <http://web-nest.ptokyo.org/>【近日変更予定】

HIV陽性者の視点で読み解く 長期療養時代

<http://chokiryoyo.ptokyo.com/>

→ <http://chokiryoyo.ptokyo.org/>

日本エイズ学会学術集会「HIV陽性者参加支援スカラシップ」

<http://www.ptokyo.com/scholarship/>

→ <http://www.ptokyo.org/scholarship/>

お手数をおかけしますが、「アドレス帳」の更新、「お気に入り」の変更をしていただきますようお願いいたします。

新人ボランティア合同研修・オリエンテーションのご案内

HIV/エイズに関する支援と予防啓発活動などに取り組む特定非営利活動法人ぷれいす東京では、活動に参加できるボランティアを募集しています。

性別、年齢、セクシュアリティ、HIV/エイズの知識や活動参加の経験の有無などは問いません。興味のある方は、どなたでも参加できます。ぜひオリエンテーションにご参加ください。

活動に参加する／しないは、オリエンテーション終了後に決めていただいてもかまいません。ただし、ボランティア・スタッフとして活動を希望される方は、その後に行われる3日間の基礎研修を受講し、修了後必ず1年間は活動に参加できる方とさせていただきます。

研修では、多彩な講師陣の講義やワークショップを予定しています。ご期待ください。

ボランティアを募集している活動

- ・HIV/エイズ電話相談
(感染不安のための電話相談)
- ・バディ
(HIV陽性者のための直接ケア)
- ・Gay Friends for AIDS
(ゲイによるゲイ・コミュニティ向け予防啓発活動)
- ・Peer Empowerment Program
(女性向け予防啓発活動)
- ・ネスト・プログラムの運営のサポート
(陽性者と周囲の人のプログラム)
- ・Webのデザイン、更新作業、事務作業や発送作業のお手伝いなど

■ 新人ボランティア・オリエンテーション

[日時] 2014年9月6日(土)

14:00～16:00(受付は 13:45開始)

※参加希望の方は、あらかじめメールか電話でご連絡ください。

[会場] 新宿NPO協働推進センター 501会議室(5F)

東京都新宿区高田馬場4-36-12

(JR高田馬場より徒歩15分／都営バス 飯64・上69「小滝橋」下車徒歩4分／東京メトロ東西線落合駅より徒歩13分)

[当日のお問い合わせ先]

ぷれいす東京 携帯電話：080-5387-8341
(13:00～)



■ 研修日程(各日10～17時の予定)

9月14日(日)

9月15日(月・祝)

9月21日(日)

※研修内容や場所等の詳細については、オリエンテーションで説明します。

※研修に参加したいがオリエンテーションは都合がつかない、また全日程への参加は難しいが活動したい、という方はご相談ください。

[申し込み・問い合わせ先]

TEL 03-3361-8964(月～金 12～19時)

E-mail: office@ptokyo.org

※2014年6月23日から、メールアドレスが「com」から「org」に変更になりました。

(担当：牧原)

専門家の合同研修参加について

各地域でHIV陽性者の周囲の環境整備に貢献する、保健、福祉、医療など関連領域の専門家からの参加希望に応じて、昨年度より受け入れを始めました。参加は有償。先着5名まで。詳しくはWEBサイトにて。

編集後記

- ・台風が通過した夜、エキストラスーパームーンを少しだけ見ることができた。iphoneのビデオで撮影して再生したら、満月の近くを不規則に動く白い物体が写っていた…。宇宙大好き！(こんどう)
- ・8月9日、職場での差別を訴えていたHIV陽性の看護師が全面勝訴した。本人の同意なく、診療情報を労務管理に流用する違法性。勤務先病院による陽性の看護師から患者の感染を懸念しての就労制限など、いずれも不当であるという当然の判断であった。(いくしま)
- ・初の20ページ特大号です。おかげさまで中身もびっしり。是非じっくり読んでみてください。(やじま)

編集・発行：特定非営利活動法人 ぷれいす東京

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-11-5 三幸ハイツ403

TEL: 03-3361-8964(月～土 12～19時 ※祝祭日を除く)

FAX: 03-3361-8835

E-mail: office@ptokyo.org

ぷれいす東京: <http://www.ptokyo.org/>

Gay Friends for AIDS: <http://gf.ptokyo.org/>

web NEST: <http://web-nest.ptokyo.org/> 【近日変更予定】

Twitter @placetokyo (<http://twitter.com/placetokyo>)

Facebook: <http://www.facebook.com/PLACETOKYO>